2021 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

川上 香

１．事業実施の目的

博士論文執筆のための調査

２．実施場所

静岡県静岡市

３．実施期日

2021 年　4 月　22 日（木）～2021 年　6 月 1 日（火）

４．成果報告

●事業の概要

報告者は南アルプス周辺山村の焼畑と常畑の変化と持続について、変化の過程と作物に着目して調査を行ってきた。焼畑とは山林を焼却して畑をひらき、数年間耕作して放棄する畑のことで、調査地である静岡市Ａ集落では、1950 年代に既に衰退している。常畑とは家周囲や山間にある畑で、長年にわたって耕作が行われている畑である。Ａ集落の常畑では作物の多くは小規模流通か自給用に利用されていた。今回は常畑の作付け作業、チャの収穫作業の参与観察を行った。

調査の目的は、Ａ集落で生まれ、焼畑と常畑の耕作を経験し、現在も常畑と茶畑を維持しているＡさん（女性・90 代）と農作業を共にし、在来作物の栽培法や持続の理由、チャの栽培の変化の過程と現状を明らかにすることであった。調査対象者はＡさんを含めたＡ集落に常畑を持つ 10 名とＡ集落から近隣の集落に転出し、転出先で常畑を持つ 2 名である。対象者から在来作物のカブナを中心に聞き取り調査を行った。また静岡県立図書館、静岡県庁、静岡市役所（支所）で資料閲覧を行った。

●本事業の実施によって得られた成果

在来作物のカブナの利用と栽培方法、チャの栽培の変化の過程と現状について明らかにすることが出来た。以下はその概要である。

1,カブナの栽培と利用

2019 年に実施した本事業の成果で、現在静岡市葵区に残る在来作物のカブナが焼畑でも栽培されていたことを報告した。Ａ集落のカブナを近隣集落の 1 名は「カブナ」、1 名は「フユナ」と呼んでいた。「フユナ」と呼ぶ 1 名はカブナの種子をＡ集落の姉から譲渡されている。Ａ集落では 5 名、近隣集落では 2 名がカブナを食用に利用している。これら 7 名は焼畑耕作の経験があるが、焼畑でカブナを栽培した記憶をもつ人はＡ集落の 3 名と近隣集落の 2 名の合計 5 名であった。Ａ集落では焼畑を開いた年にはヒエを栽培していた。この時カブナも播種し、ヒエとカブナの種子を混ぜ合わせて播種することもあった。焼畑衰退後、現在ではカブナは常畑で栽培されている。しかしカブナを播種して栽培すると答えた人は「フユナ」と呼称している近隣集落の

1 名で、残りの 4 名は前年のカブナを蕾立ちさせ、菜花の部分を食利用した後、カブナの一部を種子ができるまで常畑に残しておき、枯れるまでそのままにしておく（図 1 ）。このため種子散布が自然に行われ、11 月頃、勝手に生えてくるカブナを主に利用していることがわかった。またこのカブナは栽培期が長いと見られ、A さんは勝手に生えてきた 15 ㎝くらいの菜を菜花の利用が終わる 5 月末にも利用していた。また調査地では日本ミツバチの養蜂が行われていたが、カブナの菜花はミツバチの蜜源ともなっており、養蜂との関連もあることがわかった。以前であればカブナは茶畑や道端などに生えたものから菜花を採集するものであった。しかし、近年は動物の食害で常畑以外では生育が難しくなっている。A さんは昭和 60 年に常畑作物の大規模な食害にあった。

2, チャ栽培の変化と現状

A 集落ではチャ、シイタケ、ワサビが主な商品作物であった。他に木も売ることがあった。A さんは幼少であった昭和 10 年代に、父親が集落の 6 名と茶工場でチャを加工していたことを記憶している。家近くの斜面畑にチャはあり、現在多くの茶畑で採用されている列状の茶畑ではなく、チャの株が丸く仕立ててあるものが点在して生えていた。A さんは結婚後の昭和 34 (1959) 年に婚家の山で行った焼畑を最後に焼畑耕作を中止している。それと前後するように、家近くの上方の焼畑跡地を常畑に変え、それを更に茶畑に変えた経験を持つ。また他家が焼畑を茶畑にした土地を取得し、チャの増産を図った。自動車道路が開通したため、商品作物の搬出が大量に行えるようになったことや、高度経済成長期を迎え、チャ、シイタケ、ワサビの販売価格も高かったことが影響している。しかし、近年は価格が低迷するようになった。A さんは「ここ 10 年でチャの値段が下がり、加工料が上がった。」と感じている。昭和 50 年代から 60 年代にかけてチャの栽培面積を減らし、現在は加工した茶の半分は身内用の「飲み茶」と呼ぶ自給用茶であり、残りの半分を長年の顧客と、親族の関係者に販売する。栽培面積が多かった頃は「お茶摘みさん」と呼ぶ人々を収穫期に雇用していたが、現在は家族や親族の支援で収穫を行うようになっている（図 2 ）。

図 1　A さんの常畑に咲いているカブナの菜花（2021 年 4 月 23 日撮影）

図２　Ａさんの茶畑の収穫の様子（2021 年 5 月 16 日撮影）

●本事業について

この事業のおかげで、経済的負担が軽くなり調査地に長期間滞在することができました。またコロナ感染対策として、自ら PCR 検査を受けてフィールドに入るつもりでしたが、その費用も助成していただきました。おかげで、調査先の皆さんに対して安心して聞き取り調査をお願いすることができました。また長期間続けて観察しなければわからなかった作業内容や、何度も顔を合わせることで生まれる信頼関係は、フィールド調査において何物にも代えがたい事だと思います。コロナ禍の中、また農繁期に長期間参与観察をお許しくださった現地の皆様、調査をご許可くださった先生方、調査手続きのご支援をいただいた事務の皆様に深く感謝申し上げます。このような体験と調査の機会はとても貴重であり、今後も継続していただけますようお願い申し上げます。